

都留文科大学報

第126号

2014年
12月15日(月)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学内
☎ 0554-43-4341 URL : <http://www.tsuru.ac.jp/>



第41回鶴鷹祭(開会式)



夏季オープンキャンパス(英文学科模擬授業)



第59回桂川祭(正門)



宝小学校児童大学見学(図書館ツアー)

特集 COC 推進機構設置 2

新設「COC 推進機構」について
専任教員着任あいさつ 山口博史准教授

学外研究報告 4

社会学科教授 横田 力

夏季休業を利用して学外で学ぶ 5

初等教育学科教授 坂田有紀子／3年 川村修央
国文学科講師 菊池有希／4年 白鳥あゆみ
英文学科准教授 加藤めぐみ／3年 市村早希
社会学科教授 渡辺豊博／4年 松原慶彦
比較文化学科教授 伊香俊哉／1年 尾形はづき

教育実習を終えて(報告) 10

初等教育学科3年 藤井駿美
国文学科3年 中山幸恵
英文学科4年 小池詩子
大学院文学研究科/社会学地域社会研究専攻1年 幾田 遼

講演会だより 14

第10回地域交流研究フォーラム
国文学科(国語国文学会春季講演会)
英文学科(英文学会・英文学科共催前期講演会)

文大だより 17

第41回鶴鷹祭開催
陸上競技部松本沙耶子選手全国大会で優勝
陸上競技部中村美咲選手全国大会で準優勝
陸上競技部日本選手権リレー大会で入賞
女子バレーボール部関東大会で優勝
合唱団6年連続全国大会金賞受賞
第7回つる白熱教室
第9回つる白熱教室
第59回桂川祭開催
道志村学生交流会
岡崎朋美特任教授任命式
夏季オープンキャンパス報告
秋季オープンキャンパス報告
前期修了者卒業式
現職教員教育講座
教員免許更新講習
小学生による大学見学
前学長 加藤祐三先生が叙勲受賞
県民コミュニティーカレッジ「映画から見る韓国事情」
都留文科大学創立60周年記念事業について
本 ぶんだい堂
編集後記…坂田有紀子 28

特集

新設「COC 推進機構」について

「COC (Center Of Community) 推進事業」とは

〔背景〕

大学及び大学を構成する関係者は、社会の変革を担う人材の育成、「知の拠点」として世界的な研究成果やイノベーションの創出など、重大な責務を有しているとの認識の下に、国民や社会の期待に応える大学改革を主体的に実行することが求められている。

その中で、目指すべき新しい大学像として、学生がしっかり学び、自らの人生と社会の未来を主体的に切り拓く能力を培う大学、地域再生の核となる大学、生涯学習の拠点となる大学、社会の知的基盤としての役割を果たす大学が挙げられる。(文部科学省「地(知)の拠点整備事業」公募要領より一部抜粋)

COC 及び COC 推進機構とは

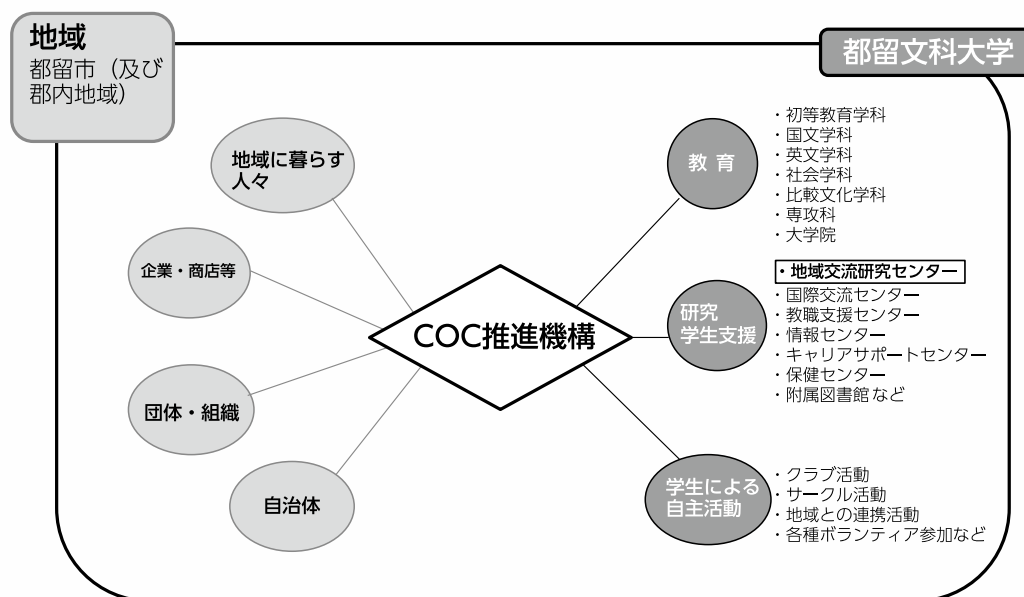
本学が、このような状況の中で、新たな研究事業である COC「地(知)の拠点作り」をおこなうためには、新たな組織を含めた体制づくりが必要である。本事業は文部科学省の採択事業としてではなく、本学の独自事業として実施することが決定された。これにともない新たな地域貢献・地域連携事業を一元的に企画・実施をおこなうための組織として「COC 推進機構」を設置することになった。

下の図をご覧いただきたい。本学ではこの地域をフィールドとしておこなってきた様々な活動がすでにある。それら諸活動が個別におこなってきた地域の諸機関・団体との関係づくりを、COC 推進機構は地域との窓口となって深めていくことになる。そのために、COC 推進機構が地域と大学を結ぶハブとして、地域のニーズと大学のシーズ(教育・研究活動、支援活動)を把握し、適切な調整をすることが、この事業推進の基礎となる。これに先立って、事業運営組織として COC 推進機構を設立する必要があり、活動のための体制を整えた。またこれに伴う人員として平成 26 年 10 月 1 日付で専任教員 1 名を採用した。

COC 推進機構専任教員の役割

これまで蓄積してきた地域に関わる大学の資源(シーズ)を、地域のニーズとマッチさせることにより、地域の活性化、大学の教育・研究の充実に貢献することが求められる。また、研究活動の様子や成果を学内外、地域や世界に発信することを期待する。そのために、学内外の組織や機関と協力・連携しながら研究活動を調整・統括することが必要である。特に本学「地域交流研究センター」との協力関係を維持しながら、更に本学 COC 事業を学術的な裏付をもとに蓄積、発展させることが求められる。この事業の円滑な運営を実現するための専任教員の役割と期待は非常に大きい。

COC 推進機構長



特集

専任教員着任あいさつ

文大に着任するにあたって

COC 推進機構准教授
山口博史

今回、COC 推進機構に着任した山口博史です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は三重県鈴鹿市の生まれで、地元の大学に通い、フランスに留学した後、名古屋で大学院生活を過ごしました。名古屋での大学院時代は、大学の留学生宿舎で住み込みの世話役（古い表現を使うことが許されるなら「舎監」がもっとも近いと思います）を8年弱つとめ、その経験を活かす格好で大学の国際化推進教員（留学生担当教員）を5年あまりつとめました。留学生の世話役には、様々な仕事があります。掃除、日常的な生活相談への対応、イベントの運営、トラブルの解決に始まり、ビザの取得や宿舎の手配、渡日までの機会をとらえた生活・学習面でのガイダンス、家族の世話など、アカデミックな空間に「ひと」を受け入れていくために考えられました。この仕事を「渡し守」と表現したことがありますが、13年にわたって世界の国々からやってくる多

くの人たちの「生活のすべてを」世話し、そのための組織を作っていく経験をしたことは、大変貴重なものだったと思います。

私の専門のひとつは都市・地域社会学です。これまでの国際交流にかかわる職業上の経験は、国内外の様々な事例を意識しつつ複眼的な思考をもって都市や地域をみることをつねに私にもとめてくるものでした。ある地域やそこに住む人びととしっかりかかわることはむしろ大切なことです。同時に世界の様々な国ぐにの人々とかかわり、欧州、東・中央アジア、南米に出かけて現地の人々と交流した経験は、私に比較の視点をつねに意識させるものでした。そのためには自分の目の前の人や地域はどのような社会的背景のもとにあるのか、広い世界の中で、構造的な位置づけを考えることが必要です。

アメリカの社会学者 C.W. ミルズは1959年に『社会学的想像力 (*The Sociological Imagination*)』を著し、時代の大きな状況と様々な人々の内面・外面のつながりを把握することが重要な能力だとしました。これは「社会学していく」ことには重要な能力です。そしてそれを応用し、実地に活動していくうえで、とくに大学という研究教育機関と地域をつなぐさいには必要不可欠の能力といえるのではないでしょう

か。社会学を専攻した人は、この力をつけるためのトレーニングを知らず知らずのうちに受けることになります。それは学問的な力にとどまらず、そこから一步実践の世界に進み出るさいにも大切な財産になります。自分が生まれたところ、学問や仕事のために住むところ、そこでの目の前の状況を出発点に世界大の発想をすることを常に意識することは、今後いっそう重んじられることになるものと私は確信しています。

学生の皆さんには私がこうした力を実地ではぐくんでいく手助けができればと思います。すぐには成果が見えないこともあるかもしれませんが、しかし、地域の様々な状況にかかわることと大きな時代の流れを結び付けるよう思考することに地道に取り組んでいけば、その根気は多くの意味で自分も含めた多くの人々の生活や暮らしを豊かなものにつなげていくものと、私は考えています。一緒に頑張りましょう。

学外研究報告



学外研究を終えて

社会学科教授
横田 力

私は2013年度11月から3月末日まで学外研究の貴重な機会を得た。私はこの半年間を最大限有効に使うと決意し抱負を抱いた次第であった。

その抱負とは、現在の日本社会の矛盾が最も強く現れ、それが構造化することによって現代史に刻印を押すようなフィールドを中心にして憲法現象を捉え、理論化するということであった。また、研究フィールドにはこれまで足を運んできた場所から東北地方と沖縄を選んだ。

東日本大震災に関してはこれまでの交流を足がかりに、支援者とともに福島県の太平洋沿岸部を車で北上し、居住困難区域から入り、帰還困難区域のラインぎりぎりを何度も視察し、仮設住宅にお住まいの方々、少人数で出勤しながら町を守っている職員の方々とのお話と聞き取りに多くの時間を割き、映像を含むデータなど貴重な研究の資料を得ることができた。

これが2月のことでこの後、5回に亘って福島を中心に調査、学習のために当地を訪問、歴史理論として捉えることができるようになったと自覚している。とりわけ2月以降、磐城市を中心とする被害者を原告とする「生業」訴訟弁護団、「ふるさとを返せ」訴訟弁護団の方々と知己を得たことは今後の大きな励みであり、糧となるものであった。この問題では今年に入ってから大飯原発差止め訴訟で画期的な差止め容認判決が出されまた8月には福島県下での被害者女性の自死事件で、事故と

自殺の因果性を認め東電の不法行為責任を弾劾するという象徴的な事例の積み重ねがみられたことも興味深い。また上記大飯原発差止め判決において容認の理論的根拠となった人格権概念は従来の身体的、生命権的な法益をはなれ、人間の不安感を「合理的な不安」と捉え、それを現代社会において十分保護されるべき個人々の生活利益としたことが画期的な意味をなしている。

以上の諸判決の内容的傾向は沖縄問題を見る上での共通の枠組みを持っていて、一層私の研究を意味深いものになっている。ここで話を沖縄に転じると「島ぐるみの闘争」の始点となった伊佐浜から'67～'69年という返還わずか3～4年前に闘われ勝利を克ちっていった混布の闘争現場そして伊江島へ足を運ぶことで多くの知見を得ることができた。混布では奇しくも「東シナ海前にみわれらが生きた土地がある。この土地こそわれが命・・・」と続く大西進作曲の「一坪たりとも渡すまい」の曲を当時19歳で作詞した農民運動のリーダーの娘さんとお会いし、御自宅で打ち解けたお話を聞いたことに大いに感激したのであった。そしてこの娘さんは伊江島からはじまる「島ぐるみの闘争」の生き証人でもあった阿波根昌鴻氏の娘さんと親しく、この詞は混布で生まれたが伊江島の風景を脳裏におきながら作ったものとのことであった。この後伊江島へと名護・本部半島を経由して渡り、さらには慶良間諸島の渡嘉敷島で米軍の伊江島上陸とともに渡嘉敷へ

渡ってきた島民と一体化する中で起こった集団自決の模様を、また『沖縄ノート』等を中心に争われた大江健三郎氏の集団自決裁判の実際を現地島の住民の方から取材することができた。

最後はやはり普天間、嘉手納基地を視察、実地見聞し、現在の沖縄における基地問題が「事故の不安」「墜落の不安」「戦争の不安」があってもそこに生き続けなければならない人々の人格権及び人間としての尊厳性を、いかに強く蝕んでいるかを、実体をもって感得したのである。これは先の東北における原発被害に基づく「合理的な不安」の延長上に捉えられるもので、福島における調査では子育て世代の母親の約25%がそして沖縄では沖縄戦体験世代のやはり約20%余が抑うつ症、統合失調症等の罹患そして発症の確率係数の中にあるとの共通した臨床調査の結果は深く強く我々の心を動かすものであった。

以上、この2つの調査を通して、共通する人々の苦悩を戦後日本という現代国家が底位する社会構造に原因を持つものとしてその因果性を追及することをしないでは現代社会科学の存立基盤が問われるもの、と気持ちを強くするものであった。研究とは机上の理論と現場との往復を必要条件として教育を通した若者の成長への導き、といった要素の濃密なつながりを不可欠の環とするものとの確信を再度抱いて学外研究を終えることができた。本研究にあたり御協力いただいた大学及び関係者の皆様には改めて感謝申し上げる次第である。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

富士山の生態系について学ぶ



初等教育学科教授
坂田有紀子

初等教育学科の自然環境科学系では、毎年「自然探求」という科目で、富士山の動植物の生態を学ぶ野外実習をおこなっています。今年は総勢 18 人で 8 月 6 日と 7 日の 1 泊 2 日でおこないました。学生たちはこの実習をとおして、これまで「風景」としてしか認識していなかった植物たちを、「それぞれが個々の特徴を持ち、環境との関わりの中で巧みに生き抜いている植物たち」へと認識を新たにします。そこに生きる生きものたちの生態を理解し、同じ生きものとして敬意を持てるようになることは、自然と共生した持続可能な社会の構築のためにも大切なことだと感じています。小学校教員を目指す学生たちにそのことを少しでも感じ、学んでもらえればと思います。



富士山実習に参加して

初等教育学科 3 年 川村修央



火山荒原に生える植物の調査

私が所属する自然環境科学専攻には、「自然探求」という科目があります。そのなかの生物分野の授業は、富士山 3 合目から 5 合目までの植物の観察と調査をおこなうもので、私たち専攻の学生は、富士山実習と呼んでいる。私は、この授業を 1 年生の時に履修したのだが、今回は実習のアシスタントとして参加した。私にとってこの実習は 2 度目だったので前回よりも充実したものになりたいと思っていた。そのため、植物図鑑や富士山の植生についての本を読み、少しでも知識を増やしてから実習に臨むようにした。そして、いよいよ実習へ。

実習は 5 合目までバスで行き、そこから下る行程だ。火山荒原から疎林帯、カラマツ林、シラビソ林などを経て極相状態に達した森林までを歩く。そのなかで様々な

動植物や、彼らの暮らしの痕跡を見ることができた。2 年前は先生の説明を聞くことに必死で、自分から植物や動物、またその痕跡を見つけることができなかった。しかし、今回の実習では前回の経験やその後、何回かの富士山での活動、本で学んだ知識があったため、より多くのものを見ることができた。火山荒原では 2 年前の実習では気づかなかった植物を見つけることができた。また、2 年前は一度もその姿を見ることができなかったホシガラスも何度も見ることができた。さらに、夜に星空を見に行った際にはイタチかテンが動く姿も見ることができた。動物の食痕も多数見ることができた。これは、私の自然を見る目が 2 年前よりも豊かになったためだと思う。各植物や動物の特徴や性質について分かってきたため、より多くのものが見えるようになったからだろう。この経験を通して、私は自然を自分の目で見るとはとても意義深いことであると改めて学んだ。インターネットやテレビが普及した現在、自宅にいながら世界各地の素晴らしい自然を見ることができるとは、野外での観察はそれを遙かに超える喜びや感動がある。自分で何かを見つけたと

きの喜びや感動は、教科書などで得た知識をより活きたものにしてくれた。そして、今回の経験を通して、私はもっと富士山の自然について知りたいと思った。富士山に生息するコケ植物、富士山の地質や気象など知らないことが沢山ある。それらを知ることによって更に自然を多角的に見られるようになると思う。そう思ったこともこれから学んでいきたい。

また、今回の実習に私はアシスタントとして参加したが、逆に実習生の 1、2 年生に教えてもらうこと、気づかされることが沢山あった。そのような経験から、私は様々な人と一緒に自然を見つめることで、より多角的かつ深く自然を捉えられることを学んだ。そのような貴重な機会が大学の授業としてあることは私にとって大きな喜びだ。実習中に様々なことを教えてくださり、このような貴重な経験をさせて下さった坂田先生と一緒に実習をおこなった仲間たちに心から感謝したい。



リスなどの動物がゴヨウマツを食べた跡。海老フライに似ている。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

韓国を見、日本を見る



国文学科専任講師

菊池有希

今年度の「日本文化史演習 A」では、夏季休業期間の最後の週を利用して韓国に行ってきました。四泊五日の日程でソウルと慶州をまわり、古代から現代までの韓国のさまざまな表情に触れてきました。

参加学生 10 名のうち 9 名が海外経験が初めてということで、異国の文化に直接触れるという経験を各自新鮮な心持で楽しんでいました。「日本を通して韓国を見、韓国を通して日本を見る」という今回の文化体験が、参加学生のその後の学びに意味あるかたちで活かされてゆくことを願っています。

日本文化史演習 A
(韓国) に参加して

国文学科 4 年 白鳥あゆみ

日本文化史演習 A (韓国) を履修し、9 月 23 日から 9 月 27 日までの日程で韓国に研修に行きました。今回の演習の目的は日本文化とも馴染みの深い韓国の文化について学ぶことです。ソウル市内を中心に様々な場所へ行き、韓国の文化や生活環境を学ぶことができました。

初日は特に動きはありませんでしたが、韓国の空港に到着するとキムチの香りがして韓国に来了ことを実感しました。二日目は韓国国立博物館を見学した後、韓国外国語大学で授業を見学、学生の方と交流しました。授業は和歌

について行われていました。学生同士の交流では、日韓での生活の違いや、お互いの国について興味のあることを聞きあい、お互いがお互いの国についてどのように感じているのか知ることができました。

三日目は景福宮、宗廟を見学した後に、朝鮮王朝時代の街並みが残る北村周辺を散策しました。特に、宗廟では敷地に入っただけで厳かな雰囲気伝わってきました。専門のガイドの方が案内してくださり、説明に聞き入っていました。四日目はソウルを離れ、新羅の都があった慶州を、早足にはありますが見学しました。帰りの時間を考えての日程だったのでまだまだ見足りない部分があったことが残念です。

最終日は、昼の集合時間まで自由行動でした。私は友人とともに加藤敦子先生に韓国の書店に連れて行っていただ



初日、韓国の家庭料理を美味しくいただきました

きました。面白かったのは、韓国で出版されている日本の観光ガイドに、日本で出版されている観光ガイドには載っていないような場所が紹介されていたことです。外国の方が日本のどのようなところに興味を持っているかということが新たに発見できたような気がしました。

今回初めて日本以外の国に滞在して文化や生活の違いに驚くことばかりでした。日本の常識にとらわれている自分の視野の狭さを実感し、恥ずかしく思ったこともありました。飛行機で約二時間と近い距離にある国ですが、匂いや雰囲気、習慣など異なることが多く、様々な体験をすることができました。四泊五日と短い期間ではありましたが、有意義な時間を過ごすことができました。



慶州の石窟庵での集合写真

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

海外短期留学について



英文学科准教授
加藤めぐみ

長期休暇は、語学研修、ホームステイなどを含んだ短期留学をする絶好の機会です。英語を学ぶ留学先として、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに加えて、近年、人気が高まっているのがフィリピンのセブ島です。

フィリピンではタガログ語、ビサヤ語と同時に英語が公用語として使われています。マニラに比べて治安もよく、費用も手頃、さらに島の人々が皆フレンドリーというセブ島の語学研修にはまっているゼミ生の市村さんに、その魅力を語っていただきました。



「セブ島留学体験記」

英文学科3年 市村早希



マンツーマンレッスンの授業の風景

私は昨年と今年の夏休み、フィリピンのセブ島に語学留学しました。セブ島は成田から直行便で約5時間、気候は1年を通して夏で、治安もよく、地元の方も明るく親切でとても過ごしやすいところです。大学に入り英語を学んでいる中で、インプットばかりでアウトプットする機会がなかなかないと感じていました。自分の英語力を高めたい、実用的な英語を学びたいと思ったことがセブ島留学を決めた理由です。

私はNILSという日本人が経営する語学学校で勉強しました。ここでは1日6時間

のマンツーマンレッスンを受けることができ、科目も自分で自由に選択することが可能です。この「マンツーマン」という点が気に入って、私はNILSを選びました。日本での一斉授業とは違い、先生と1対1で授業が受けられるため、自分のペースで学ぶことが出来ます。また疑問に思うことがあればすぐに質問でき、自分の英語に自信がなくても1人だと恥ずかしさもなく英語を話すことができます。私は特に発音の授業がとても勉強になりました。日本人が苦手としている発音を中心に、先生の口の動きを参考にしながらきちんと発音できるまで何回も繰り返し練習します。様々な例を提示しながら丁寧に指導してくれます。日本ではなかなか学ぶことのできないネイティブの発音を、マンツーマンという形でしっかり学べたことは非常に為になりました。

語学学校での素敵な先生方との出会いのほかに、寮での日本人学生との出会いも素晴らしいものでした。NILSの寮は日本人のみで、夏休み時期ということもあり全国からたくさんの学生が来ていました。みんな年齢も出身地もばらばらでしたが、同じ英語を勉強する仲間としてすぐに打ち解け、観光地にでかけたり学校の後に買い物に行ったりと楽しい時間を過ごしました。たくさんの思い出を作れたこと、かけがえのない仲間と出会えたことは、これからの人生の財産になると思います。今回セブ島留学したことで英語に対する気持ちがさらに強くなり、勉強のモチベーションが高まりました。海外に行くという経験は自分を成長させてくれます。みなさんにもぜひ、セブ島留学を体験してほしいと思います。



終了証を受け取って

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

英国を訪ねて。



社会学科教授
渡辺豊博

今回の英国視察は、私が関わっている「グラウンドワーク三島」の主催で、毎年、私のゼミ生が参加し、英国のNPOや社会的企業などを学んでいます。特徴は、NPOの具体的な活動に参加し、同年代のスタッフと現場で作業したり、地域住民とのワークショップに参加したり、パブでの人的交流もあります。学生は国際的な問題意識や英語習得の重要性、市民社会のあり方を学び、異文化の多様な刺激を受け、成長しています。



英国のNPO活動を学ぶ英国 スタディツアーに参加して

社会学科環境・コミュニティ創造専攻4年
松原慶彦

私は、9月2日から10日間ロンドンで行われた英国スタディツアーに参加しました。これは、地域環境計画ゼミの渡辺豊博教授とともにロンドンを中心にイギリスのトラスト運動における現地の方のお話を聞いたり、実践現場の視察や服役されていた方の社会復帰のために雇用する社会的企業の方に会うなど、普通に旅行しただけでは学べない貴重な経験をさせて頂きました。遊歩道沿いの緑地帯の整備などのボランティア作業の体験活動もあり、現場視察でもバーミンガムとコッツ



公園でのボランティア体験

ウォルズに貸切のバスでロンドンから楽に移動でき、とても楽しく有意義な研修でした。

私自身も今まで海外に行ったことがなく、また英語も十分に話せないで果たして自分が何かを得ることができるのかと、研修前には不安も抱えていました。しかし、バーミンガム大学客員教授の小山善彦先生の丁寧な通訳もあり、現地の方のお話や視察現場の解説はとてもわかりやすく、その方々の熱意を感じ取ることができました。

また、地域環境の再生やトラスト運動の分野でイギリスは大変進んでいるということ以前から聞いていましたが、現実には、いい事ばかりではなく、実際の現場での問題、例えば団地の町内会の理解を得ることや、行政の弱体化で今年度から補助金が無くなってしまい自力でグラウンド



パブで仲間たちと

ワーク運動を行っていかねばいけなくなったこと、服役されていた方を雇用したが窃盗癖が治せず、うまくいかなかった話などこれまで苦労されてきたお話しもしていただき、改めて社会的活動の大変さを感じることができました。

このように書いていると堅苦しい研修のようですが、実際には、その場その場で昼食休憩とともに自由時間を頂きましたし、夕方にホテルに到着してからはほぼ毎回自由だったので、オペラ鑑賞やパブにいったりと研修生それぞれが楽しめたと思います。

在学中に、この研修に参加できたことにより新たな刺激を受け国際的な視点が広がったと感じています。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

「ヨーロッパ 戦争・
迫害の記憶」比較文化学科教授
伊香俊哉

比較文化学科ではフィールドワーク（新カリではスタディ・ツアー）という科目群があり、毎年日本の内外で1週間ほどの見学旅行を行っている。その一つスタディ・ツアーⅢでは3年振りにアウシュビッツを中心とした見学を行った。総勢21名という大所帯での行動で大変だったが、ナチス・ドイツの加害・犯罪行為が今日ヨーロッパでどのように記憶されているのかを直に見ることができ、意義深いツアーであった。

「スタディ・ツアーを
終えて」

比較文化学科1年 尾形はづき

2014年9月11日から9月17日の間、スタディ・ツアーに参加した。ナチス・ドイツによるホロコーストの実態と記憶をテーマに、ポーランド、チェコそしてドイツの3ヶ国を訪れた。テーマに対し、訪問期間がとても短かったため忙しい一週間であったが限られた時間のなかで集中して学習することができた。



アウシュビッツの門

ホロコーストは一般的に「ユダヤ民族大虐殺」を表す言葉である。そして、そのホロコーストに深く関係している強制収容所の存在がある。強制収容所の1つであるアウシュビッツ強制収容所だけでも収容所内の犠牲者は110万人を下らないといわれている。最大の犠牲者となったユダヤ人の中には親戚や家族ごと連行されてしまったうえ記録も残さずに殺されてしまったことにより個人の存在すら記憶されていないケースもある。欧州全体のユダヤ人犠牲者は600万人といわれている。

ヒトラーはアーリア人の人種的

優秀性を信じていたためセム人種をそれらよりも劣ったものとし、社会から排除しようとした。しかし「アーリア」というものは言語上の分類であり人種としてのアーリア人は存在しない。この人種差別意識は非科学的な思想に基づいて19世紀のヨーロッパで生まれた思想である。特にドイツとフランスでは反ユダヤ運動と連動して社会に広く浸透した。この運動は反セム主義ともいわれユダヤ教の教義や習俗に反対するというよりユダヤ人をセム人種の代表とみなして社会から排斥しようとするものだった。

歴史が実際に繰り広げられた土地に赴くことは書籍や映像とはまた違った新しい視点を与えてくれ、あるときには想像以上の衝撃を私たちに与える。時間にしてみれば遠く離れていても、当時の名残のある建造物そして当時から続く風土に囲まれているからこそ気がつくことはたくさんある。今回、惨劇が起きてしまったゲットーや収容所をまわるなかで考えたことのひとつは、信じられないような残酷な事件の数々が起きてからまだ100年と経っていないということだ。この60年あまりで世界はどう変わったのだろうか。

アウシュビッツ・ミュージアムで働かれている唯一の日本人ガイドである中谷さんはホロコーストに関して「ホロコーストはまだ世

界史のひとつとして一般化すべきではなく、くわしく歴史的検証をして将来の再発防止のため考察する時期だ」と語られていた。また「欧州で起きたホロコーストの悲劇を欧州がどのように、いかなる目的を持って次世代に伝達しているかについて日本人に知ってもらうことが大切だ」ともお話されていた。確かに日本人のホロコーストに対する関心はあまり高いものではない。アウシュビッツ強制収容所ひとつとっても、ポーランドではなくドイツに存在すると思っている人は意外にも多い。帰国後、彼の著書も読ませていただいた。中谷さんの戦争で終わらせず、未来に繋げようとする姿勢に深く感銘を受けたと同時に、人間の本質にまでせまる貴重なお話を聞かせていただいたことには大変感謝している。

簡潔にまとめられるような内容ではなかったため内容を絞って書かせていただいたが、10日間で様々な場所を訪れた。そのひとつひとつが私にとって、貴重な体験となった。ホロコーストという難しいテーマに関して私たちが学ばなければならないこと、考えなければならないことはたくさんある。今回のスタディ・ツアーはその足がかりとなったので、今後の学習に生かしていきたい。



アウシュビッツにて

教育実習報告



教育実習を終えて

初等教育学科3年 藤井駿美

私は実習へ行く前は実際に授業を作り、教えることができるのかと不安や緊張でいっぱいでした。実習前に少しでも自信を付けようと、大学の授業や小学校へのボランティアやインターンシップにおいて現場で学ぶ機会を積極的に取り入れていきました。現場で活躍されていた先生方のお話や現場で授業を見て学ぶこと全てが新鮮でした。このため、全部を吸収しようとしてしまい結局何を学んだのかが分からない状態のまま実習へ臨みました。

実習では特に児童との関わり・授業実践から学ぶことが大きかったです。まず初めに児童との関わりでは、担当クラスの児童39名と「毎日一人一言は喋る」を目標に、朝児童が登校する前に教室へ行き児童を迎え、中休みは児童と全力で遊び、帰りは最後の一人が帰るまで下駄箱で見送りました。こんな日々の少しの時間を大切にする事で児童は少しずつ心を開いてくれた気がします。

特に印象的であった出来事の一つに、実習最終日の二日前の給食の時間に「正しいお箸の持ち方知っている？」と私が班の児童に呼びかけると

皆「合っている?」「こう?」と興味を持ってくれたことがあります。正しくお箸を持つことができない児童に、私が「練習してね」と声を掛けると、実習最終日の給食の時間に「先生見て!お家で練習したよ!」とその児童は正しくお箸を持てるようになっていました。私がなんとなく語りかけたことばを児童は真剣に受け止め、二日間という限られた時間の中で練習していたことを想像すると胸が熱くなりました。自分が子どものころは友だちや教師から言われる一言一言に敏感だったはずなのに、いつの間にか子どもの気持ちを考えずに一方的に語りかけている自分に気がつきました。今後、子どもと関わる際には会話を大切にしていきたいです。

実習先では様々な先生方の授業を参観させていただきました。1週目には指導教諭の先生から「何かポイントを絞って授業を参観すると良い」という助言をいただいたにも

関わらず、ひたすら吸収しようとメモを取るだけでした。2週目には運動会がありました。3週目からは授業実践が始まり16時間の授業づくりをしました。私は毎時間、授業案・台本を作って授業に臨みました。毎日、授業実践をすればするほど改善点ができました。また、授業外でも児童のワークシートやノートを読むことで授業での説明不足や児童の成長を見ることができました。毎授業での失敗を次時でどのようにして補うかを考え、取り入れながら授業を作っていた成果か、実習の終盤には台本通りではなくその場に依じて自分の言葉で授業を進めていくことが出来るようになりました。また、15時間の授業を終えて漸く授業を参観する際に何に着目するかが見えてきました。

実習を終えた今、実習での経験が大学の授業や小学校でのボランティアでも活きていると感じます。今後も実習での経験を糧に充実した日々を送ってみたいです。



最終日の黒板

教育実習報告



教育実習を終えて

国文学科 3 年 中山幸恵

8 月末から 5 週間、母校の中学校で教育実習をさせていただきました。教育大から 4 名と私の 5 人で実習しました。初めは打合せの時の実習生の名簿を見て、教育大の人たちがいる中、一人で飛び込んでいくことにとても不安でした。また、私の担当が 2 年生となり、実習担当教諭から「2 年生は少し覚悟が必要です」と言われていたので、より不安と緊張が募りました。

実習が始まり、生徒とどう関わったらいいのか、何を話したらいいのか…色々考えていると、実習生の一人がもうクラスの生徒の名前を覚えていて、驚きとともに自分も負けてはいられないと思いました。次の日から生徒に話しかけたり、生徒の輪の中に入ってみたりと積極的に行動しました。すると徐々にですが、生徒からも話しかけてくれる

ようになり、生徒の事をもっと知りたいと思う気持ちが伝わったような気がしました。同じように他の実習生とも積極的に交流し、打ち解けることができました。

3 年生の授業を見学した時、教科担当教諭から「20 分時間あげるから好きに使っていいよ」と言われ、いきなりの事だったので正直戸惑いました。元々あがり症で人前に立つことが苦手でしたが、自己紹介をクイズ形式にしたり、生徒からもクラスの良い所を紹介してもらったりと、生徒と楽しく交流できました。ただ、3 年生の勢いに流されてしまったり、緊張のあまり声が小さくなってしまったので、たった 20 分でしたが自分の課題が見つかった良い体験でした。教科担当教諭からは「いきなりやって乗り

越えられたのだから、しっかり準備して臨む授業は自信をもってできると思うよ」と言われ、このような機会を与えてくれたことに感謝の気持ちでいっば

いでした。そして私の授業が始まり、グループワークを中心に取り組みました。毎時間、自分の良さと改善点を見つけ、良い所は伸ばし、反省した所は改善し…その繰り返しで、生徒がよりわかりやすく、興味を持てる授業をしたい！という一心で授業しました。中には、教科書を開いてくれなかったり、何も持っていない生徒もいましたが、「2 年生はグループワークは無理」と言われていた中、最後まで進められたので安心しましたが、達成感と同時に未熟さも感じました。

部活動にも積極的に参加し、大会も経験することができました。生徒に「また大会見に来て!」「先生のおかげでサーブ入るようになったよ!」と言われ、とても嬉しかったです。実習最終日は学校祭で、クラスの合唱を聴き、今まで練習してきた成果を出し切ろうとする生徒のやる気に満ち溢れた顔は、とても輝いていて私の脳裏に焼き付いています。

色々な困難があった 5 週間でしたが、生徒の沢山の笑顔に触れることができ、生徒との関わりや授業を通して、より一層教師になりたいという気持ちが強くなりました。母校で実習ができたこと、素敵な先生と生徒、そして仲間に出逢えたこと全てに感謝し、これからも努力していきたいと思います。



学校祭を終えて 2 年 1 組の生徒たちと

教育実習報告



教育実習記

英文学科4年 小池詩子

少しずつ残暑が落ち着いてきた9月に、母校の上田染谷丘高等学校へ二週間の教育実習へ行きました。久々に訪れる母校の門を、生徒だった頃とは違い、実習生ではありましたが、「教師」という立場でとても緊張しながらくぐりました。指導教官の「実践あるのみ」という言葉により、初日の1時間目から教壇に立つことになり、初対面の生徒たちを前に自分がどれだけのことが出来るのか不安で、逃げ出したくなりました。

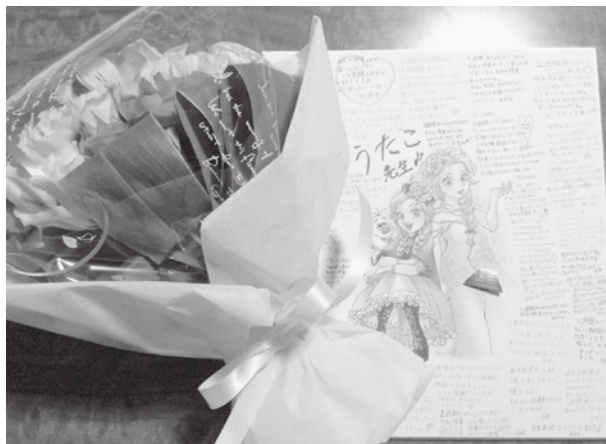
初めての授業では、緊張してしまって余裕がなく、ただ授業を進めるだけで、生徒のためにはならない授業でした。生徒像が全くつかめていないままの授業展開で、慣れていない新しい授業の進め方に対する生徒の戸惑いが見え、初日の2時間の授業は全く納得のいくものではなく、生徒に申し訳ない気持ちでした。この経験から、生徒の状況をよく理解することの重要性を実感しました。一方で、初日から授業をさせてもらえたからこそ、教師の一人としての自覚と責任を感じることも出来ました。今回の実習で担当したのは、「英語コミュニケーションⅠ」だけで

でしたが、これは英語を総合的に扱うもので、文法や内容理解だけをやればいいのではなく、多角的視点から扱うので、教える側がしっかりした英語力と知識を持っている必要があると感じました。英語が好きで話せるだけでは、英語教師にはなれないと認識していましたが、実際に授業をする中でそれを痛感しました。

指導教官はとても厳しく、正直、二週間やっていけるのか不安でした。しかし、先生の厳しさの中には熱意と優しさがあり、生徒にもそれが伝わっていることにすぐに気づきました。生徒としての私は、先生がやさしいことを良いことだと思っていましたが、「やさしさ」は時に「優しさ」ではなく、「易しさ」の意味になってしまうこともあるとわかりました。様々な点において厳しくご指導いただきましたが、研究授業後の反省会で、私の努力を認めたうえでの励ましの言葉をいただ

き、とても感動しました。初めから自分の甘さを先生に見通され、時間をかけてしっかり指導をしていただいたことが、その時にやっとわかりました。厳しさには意味があり、その人のためを思って厳しくしているのであり、先生のご指導を通して多くのことを学びました。また、生徒たちからも学ぶことの多い実習でした。ある授業で、生徒から質問をされ、どう説明していいかわからずに苦笑いをして流してしまい、その曖昧な対応を先生から指摘されました。素直にわからないことを認め、勉強を続けることも教師にとって必要なことだと痛感しました。

実習を通して、「教える」ことの難しさは身に染みましたが、生徒たちや先生方から自分が「教わる」ものが非常に多かったことが最大の収穫です。未熟でありましたが、教師として教壇に立たせていただいた期間は私の人生のなかでも、忘れられない最高の二週間でした。



生徒からの色紙

教育実習報告



教育実習を終えて

大学院文学研究科
社会学地域社会研究専攻1年
幾田 遼

今年、母校の高校で三週間の教育実習をさせていただきました。教育実習をさせていただいたことで、様々な事を直に学び、また、自分の甘さを痛感することができました。

三週間の教育実習で痛切に感じたことは、自分の甘さでした。何かを教えるとき、深遠な理解が必要であると再認識しました。この点は、理解していたつもりでしたが、完全に「つもり」であったのだと思いました。理解が深くないと、生徒の突発的な質問に答えられない、答えられずに生徒は次から聞いてこなくなる、そうした悪循環が発生するのだと痛感しました。そして、なにより理解度が深くないと自信をもって語ることが

できない、これが一番の問題であると思います。楽しそうに自信をもって語ることができない、そのような人の話が魅力的なのか、そう思いました。しかし、問題点が見つかったらそこを実際の場面で修正する機会があるのが、教育実習であるのだとも思いました。そうした機会があるからこそ教育実習の必要性があるのだと個人的に感じています。自分の甘さを痛感させられる、そして、それを修正する場こそが重要なのだと思います。

生徒との触れ合いについて、ここに教員になろうという決意を沸かせるものがあると感じました。短期間にもかかわらず、生徒は親しげに接してくれました。しかし、そ

れは親しくなった「つもり」なのだと思います。彼ら、彼女らと長い期間を通して触れあうことで真に親しい関係を築けるのだと感じます。だからこそ、教員になり長い視点で触れあいたい、教育実習はこうしたモチベーションを与えてくれるのだと、感じています。

現在、私は修士課程の一年目に所属しており、教育実習が与えてくれた、自分の甘さを克服していける時間があります。今は、理解した「つもり」、できた「つもり」ばかりかもしれませんが、そうした「つもり」も積み重ねていけば、必ずや確固たる自信になると信じています。



教育実習を終えて。集合写真

講演会だより

第10回地域交流研究フォーラム開催

9月27日(土)、第10回地域交流研究フォーラム『センターの歩んだ10年と新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)』を開催いたしました。

今回のフォーラムですが、当初、本年2月22日(土)の開催を計画しておりましたが、私たちの記憶に強く残る2月14日から降り続いた1メートルを超える積雪被害の影響により延期とさせて頂き、このたびようやく開催することができました。

発足して10年が経つ地域交流研究センターのこれまでの活動について、杉本センター長からの説明のあと、図工・美術教育と情報教育が連携した新しい取り組み『たからばこ作戦』について発表しました。

『たからばこ作戦』とは、子どもたちが主に学校の図工・美術の時間に作成した作品を撮影し、データベースで

整理、管理しながら、参加者がこれを共有、活用することを目的とした取り組みです。

また、データベース化するだけでなく、撮影者が感じた作品に対する感想を映像に添え、子どもたちにフィードバックするという活動も紹介されました。

子どもたちは自分が作品を作るために費やした時間や努力、成果を第三者によって改めて評価してもらうことで、ものを作ったり観賞したりする楽しさを知ることにつながります。このような、双方向的な交流によって、心や感性を磨き、造形表現活動を通して自己表現やコミュニケーション能力の向上を目指しています。

助言者の小松佳代子先生(東京藝術大学准教授)からは、子どもたちが作品をつくる過程をどのような経験にするかはその後の言葉かけひと



たからばこ作戦について説明する本学教員

つで変わってくる。『たからばこ作戦』をとおして図工・美術教育の可能性が広がるのではないかとのお話もありました。

参加者からは「平面作品は保存しても、立体作品は収納場所の関係で保存が難しいこともある。子どもたちの成長の証として保存されることは、子どもたちの達成感を維持するためにも、この試みは注目されるべきものだった。また、画面を通したコミュニケーションは、今後多様な活用が期待でき、楽しみである。」との感想をいただき、今後の取り組みに強い期待が寄せられています。

(地域交流研究センター)



作品鑑賞を楽しむ工夫、たからばこ型・紙芝居型の装置



会場展示

講演会だより

2014年度 国語国文学会春季講演会 井上泰至先生

『秘密と罫 一なぜ「雨月物語」は
怪談小説の名作なのか?』

講演の様子

本年度の国語国文学会春季講演会は、6月18日（水）に防衛大学校教授の井上泰至先生をお迎えし、「秘密と罫 一なぜ「雨月物語」は怪談小説の名作なのか?」の題目で行われました。井上先生は、『雨月物語の世界 上田秋成の怪異の正体』などのご著書があり、また近年は江戸時代の軍書という新たな研究領域を開拓なさっておられる、最前線の近世文学研究者です。

講演は、江戸時代の文人・上田秋成の『雨月物語』は村上春樹、三島由紀夫、芥川龍之介、谷崎潤一郎、泉鏡花など近現代の名だたる作家たちが高く評価している作品であり、作家たちのお手本ですらあった、そのように評価される理由はどこにあるのか、という問いから始まりました。『雨月物語』は注釈、典拠、

表現、モチーフなど多様なアプローチからの膨大な先行研究があり、新たな論点を見出すことが困難に見える作品ですが、井上先生の論は、秋成の小説に近代文学の読みの理論を適用しながらテキストを緻密に読むという伝統的な読みの手法を徹底し、語りの「視点」という切り口から秋成の小説の巧みさを明らかにしていくものです。斬新で柔軟な発想と正統的な手堅い方法に拠っており、非常に説得力のある論であることを、今回の講演で改めて認識しました。

後半では、「蛇性の姪」のテキスト本文を音読しながら「視点」「コード」に逐一解説を付すという丁寧な進め方のおかげで、井上先生の「読み」を具体的に共有することのできる貴重な時間となりました。

質疑応答では、講演内容に触発された質問が学生から相次ぎました。本学学生にとっては、今回の講演が、文学作品との向き合い方、テキストを読む方法、作品分析の枠組の立て方などを考える良い契機となったことと思います。新たな知の方法を獲得し、今後の課題を自ら見出してくれることを期待しています。

最後になりましたが、講演をご快諾下さった井上先生、当日ご来場の一般聴講者の方々、準備運営にご協力下さった関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

(国文学科准教授 加藤敦子)

講師紹介



井上 泰至 (いのうえ・やすし)

国文学者。防衛大学校教授、日本伝統俳句協会常務理事。博士（文学）。専攻は江戸文学、特に上田秋成・人情本・武士の文学。近年は、正岡子規・高浜虚子など近代俳句についての評論も手掛ける。

著書に『雨月物語の世界』（角川選書、2009）『恋愛小説の誕生』（笠間書院、2009）『子規の内なる江戸』（角川学芸出版、2011）『江戸の発禁本』（角川選書、2013）『春雨物語』（角川ソフィア文庫、2014）『近世刊行軍書論 教訓・娯楽・考証』（笠間書院、2014）など。

講演会だより

平成 26 年度 英文学会・英文学科共催前期講演会

『Magic Moments』

～英国ビジュアルアートと文学における
リアリズムからモダニズムへの変遷～

2014年7月9日(水)

講演者 Dr. Kamila Pawlikowska



講演の様子

講演は、イギリスのヴィクトリア時代（1837年～1901年）に見られる、モダニズムに影響を与えた近代化についての解説から始まった。イギリスにおける産業化は科学技術の発展をもたらし、政治刷新は繁栄と帝国主義を生み出したという。

絵画や文学におけるリアリズムとモダニズムを比較してみると、作品の評価や、語り手の性格、その作品を作る人々の層、そして描写の自由度など、そこには様々な違いが見られる。例えばリアリズムの芸術作品は、「歴史の流れが重要」「客観的・全能的視点」「白人男性代表」「モラルに重きを置く」といった特徴が挙げられるが、対してモ

ダニズムの芸術作品では、「個人を歴史から切り離す」「主観的・内省的視点」「女性・マイノリティ」「芸術のための芸術」などのキーワードが挙げられる。Pawlikowska氏曰く、これら異なる特徴は作品の中に顕著に見られるという。

ジェーン・オースティンやエミリー・ブロンテ、チャールズ・ディケンズやジョージ・エリオットなどの作家は、装飾を排し、主に中流階級の人々の当代の生活を描いた。彼らは小説の新しい種類を生み出し、それはさらに発展して現在の多様な文学へとつながっている。

ラファエル前派（1848年に設立されたイギリスの画家

や美術評論家、詩人の集まり）は、ラファエル自身の芸術への姿勢は、機械的・因習的であると考え、細やかで色鮮やかな14世紀のイタリア芸術へと立ち返ることを望んだ。彼らの目標とは、「自然を研究し、直接、正直にその側面を表現すること」と、「ロマン派の運動と中世文化から閃きを求めること」、「失われた精神を再興すること」であった。

イギリスで起きたリアリズムからモダニズムへの変遷がMagic Momentsであり、それが現在の文学や芸術に多大な影響を与えているなら、私たちもそれらを学ぶことでより興味が湧き、より価値のある学びを得ることができよう。私もこの講演会で教わった視点を大切にしていきたい。

(英文学科2年 高柳大輝)

講師紹介

カミラ・パブリコブスカ（博士）
(Dr. Kamila Pawlikowska)

ポーランド出身。2013年 英国ケント大学にて博士号取得。現在、成蹊大学アジア太平洋研究センターにおいてBA（ブリティッシュ・アカデミー）およびJSPS（日本学術振興会）研究員として「20世紀初頭のヨーロッパでの日本文化の受容」について研究中。

文大だより

第 41 回鶴鷹祭開催

6月21日（土）と22日（日）の2日間にわたり、高崎経済大学において『第41回鶴鷹祭（都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦）』が開催されました。

鶴鷹祭は平成26年で41回目を数えますが、前回の第40回までは本学の22勝16敗2分けと勝ち越しており、また第39回、40回と2連勝中になっています。

そのような状況で、3連覇をかけた本学は『挑戦』を、対する高崎経済大学は連敗阻止するべく『鷹の夜明け～逆襲への序章～』をそれぞれスローガンに掲げ、各々の競技で熱い試合が繰り広げられました。

2日間の激戦の末、『都留文科大学 12－10 高崎経済大学』と僅差で本学が勝利を果たし、3連覇を達成する形で今年の鶴鷹祭は幕を閉じました。



優勝旗授与



達磨開眼



交歓会

この鶴鷹祭の開催にあたり、決して近いとは言えない山梨県と群馬県に所在する2大学間で、期日の決定からお互いの宿泊先、当日の競技の詳細まで、ほぼすべてが学生自身によって運営されています。そうして開催された2日間に、学生たちは各競技に分かれて競い合い、交流を深めてきました。

その成果は、この鶴鷹祭に関わらず、舞台を移した関東大会や全国大会等の場で、両大学の二心のないエールを送り合う姿に見ることができ、そこにはお互いを掛け替えのないものとして認め合う、素晴らしい伝統を感じることができます。

来年度は舞台を都留文科大学に移し、再び熱い試合が繰り広げられることでしょう。両学の奮闘に期待します。

文大だより

陸上競技部員が全国大会で優勝！

10月3日～5日の3日間、名古屋市にある瑞穂公園陸上競技場で開催された第30回日本ジュニア陸上競技選手権大会の女子100mにおいて、本学陸上競技部の松本沙耶子選手（初教1年、静岡市立高出身）が、並みいる強豪を抑えて見事優勝しました。

松本選手は、今年4月に本学へ入学後、関東インカレ3位、日本学生個人選手権6位、日本インカレ4位と着実に実績を積み重ね、今大会において、自身のキャリアで初の全国タイトル獲得を果たしました。

なお、本学陸上競技部として、全国タイトル獲得者は3人目となり、今後の活躍が大いに期待されます。



松本沙耶子選手

陸上競技部員が全国大会で準優勝

6月20日～22日の3日間、平塚市総合公園 Shonan BMW スタジアム平塚で開催された2014日本学生陸上競技個人選手権大会の女子1500mにおいて、本学陸上競技部中村美咲（初教3年、富山県立大門高校出身）が準優勝を果たしました。

中村選手は、大学入学後1500m走に取り組み、3年目にして見事全国大会での入賞を飾りました。



中村美咲選手

陸上競技部員が日本選手権リレー大会で入賞！

10月31日～11月2日に日産スタジアム（横浜市）で開催された第98回日本陸上競技選手権大会リレー競技大会において、本学陸上競技部リレーチームが、女子4×100mリレーと女子4×400mリレーの2種目でそれぞれ5位、6位と入賞を果たしました。

我が国の最高峰を決定するこの大会での両リレーの入賞は、本学陸上競技部として、2008年以来6年ぶりの快挙となります。また、本大会で両リレーの入賞を果たしたチームは3チームのみであり、本学リレーチームが日本のトップチームであることが証明されました。



4×400mリレーメンバー



4×100mリレーメンバー

4×100mリレーメンバー：

第1走者森佑紀那（初教2年、中京大中京高出身）、第2走者池内英里香（初教4年、姫路商業高出身）、第3走者永瀬綾夏（初教1年、春日部東高出身）、第4走者松本沙耶子（初教1年、静岡市立高出身）

4×400mリレーメンバー：

第1走者園田可南子（初教2年、海南高出身）、第2走者池内英里香（初教4年、姫路商業高出身）、第3走者出塚千恵（初教1年、新潟明訓高出身）、第4走者池嶋祥子（初教3年、柏崎高出身）

文大だより

女子バレーボール部 関東大会優勝！

優勝おめでとう！！

7月12日（土）に行われた、第36回クラブカップ選手権関東ブロック大会で、チーム「Elephant」として出場した、本学女子バレーボール部が優勝しました。

昨年に引き続き、優勝という好成績をおさめ、2連覇という偉業を達成しました。



都留文科大学合唱団 6年連続金賞受賞！



全国大会会場にて（受賞後）

都留文科大学合唱団は、10月12日（日）に前橋市民文化会館で行われた「第69回関東合唱コンクール（第67回全日本合唱コンクール関東支部大会）」において金賞を受賞、7年連続で全国大会への出場権を手に入れました。

11月22日（土）アルファあなぶきホール（香川県県民ホール）大ホールで行われた全国大会では、自由曲でラトビアの作曲家E. エセンヴァルズの「A Drop in the Ocean 一滴・マザーテレサに捧ぐ」を演奏し、6年連続となる金賞及び部門第一位に贈られる文部科学大臣賞を受賞、来年長崎で行われる全国大会へのシード権も併せて獲得しました。

「これまでいただいた多くのご支援に感謝いたします。これからも皆様の心に響く演奏を目指し、ますます真摯に歩んでいきたいと思っております。」（合唱団顧問 清水雅彦初等教育学科教授）

文大だより

第7回つる白熱教室

7月8日「第7回都留白熱教室 ヴァンフォーレ甲府 城福監督講演会」

平成26年7月8日、ヴァンフォーレ甲府監督の城福浩さんをお迎えいたしました。当日は500人以上の方が来場し、そこには小学生からお年寄りの方まで幅広い世代にお集まりいただきました。

当日は監督のご要望で来場者からの質疑応答になり、地域の少年サッカーチームの子供たちが、山梨を代表するサッカーチームの監督へ一生懸命に質問をする姿を見て、そこには都留のこれからの未来があったように思えました。監督は話がとても上手で笑いを誘い会場を盛り上げ、時には冷静に真剣に質問者へ想いを伝え、その姿には偉大さを感じさせました。

過去に指導していた日本代表の長友佑都選手の話では「長友よりも上手い選手はいくらでもいた。ただ長友はチーム1になるというような目標は立てていなかった。彼の目標は世界一のサイドバックだった。」大切なことは資質ではなく強い心だと実感しました。

最後になりましたが、城福監督、ヴァンフォーレ甲府のスタッフの皆様、ご来席頂いた都留市長、県議会議員杉山様、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。



城福浩監督

実行委員長 島田修造（しまだ しゅうぞう）

講師紹介

城福 浩（じょうふく ひろし）

徳島県徳島市出身。徳島県立城北高校、早稲田大学、富士通サッカー部。監督歴は富士通川崎フットボールクラブ、U-14～U17日本代表、FC東京、ヴァンフォーレ甲府。

第9回つる白熱教室

10月29日、前回の城福監督に続き、ヴァンフォーレ甲府取締役会長、海野一幸さんをお迎えいたしました。海野さんは、過去に債務超過に陥ったヴァンフォーレ甲府立て直しの立役者です。地域企業のスポンサー契約を地道に取り付けていき、経営再建に成功しました。大企業がバックについているビッグクラブでは、その会社が機能しなくなると経営が困難になるのに対し、地域の沢山の企業の小さな柱があるヴァンフォーレは簡単に倒れるクラブではありません。そこにこのチームの強さを感じました。

またヴァンフォーレは現在、新人選手が介護・障害者施設でボランティア研修、精神疾患や知的障害の方とふれあうサッカー大会の開催、選手と地域の子供がいっしょに田植えを行う食育活動など、地域への奉仕活動を行っているそうです。「地域によって助けられたチームだから地域を助けるチームになる」講演中に仰っていた言葉ですが、何故地域から愛されるチームになっているか理解できたと思います。

今回の講演には大学生と一般の方が半分ずつ来場され、海野さんのお話を全員が真剣に聞いている姿に大変感動を覚えました。冷静に淡々と話す海野さんは時にはジョークを交え会場を盛り上げて下さいました。最後になりましたが、講演をしていただいた海野さん、ヴァンフォーレ甲府のスタッフの皆様、都留市長様、県議会議員杉山様、ご協力いただいた大学・地域の皆様、来場者の皆様に厚く御礼申し上げます。

実行委員長 島田修造（しまだ しゅうぞう）



海野会長

講師紹介

海野一幸（うみの かずゆき）

笛吹市出身。東京農大卒業後、米国留学を経て山梨日日新聞入社。政治家金丸信の番記者などを経て42歳で取締役編集局長に就任。山梨放送、アドブレン社の取締役を歴任し、2001年VFKの社長に就任。

文大だより

第 59 回桂川祭開催



ステージで熱唱

10月31日（金）から11月2日（日）までの3日間にわたり、第59回桂川祭が盛大に開催されました。今年のメインテーマは『PUZZLE』。「1人1人、1団体1団体をパズルのピースに例えて、試行錯誤を繰り返しながら桂川祭というパズルを完成させよう」という意味が込められています。

開会式でのバルーンリリースから始まり、本部棟前広場の特設ステージでは、初日から「GO! GO! BINGO!」「看板娘・看板男コンテスト」「歌っていいとも!!」などのステージ企画が行われました。また、2日目には大道芸人「Mr. カズキ」によるパフォーマンス、3日目にはお笑い芸人「キングオブコメディ」「ニッチェ」「キャラメルペッパーズ」によるライブなどが行なわれ、会場は大いに盛り上がりました。

コミュニケーションホールでは、3日間にわたって、プラ板ストラップやアクセサリ作りなどが行われ、またキャンパス全域を会場としたパズルやスタンプラリーも開催されました。

今年は残念ながら学長は不在でしたが、「副学長と鍋ろう」と題して、学生の作ってくれた美味しい鍋を食べながら、阿毛久芳副学長と多くの学生が交流を楽しみました。学生にとっては、普段は交流することが少ない副学長を身近に感じるとともに、今後の人生において役立つ話を聞くことができる良い機会となりました。

これら本部の企画だけでなく、学内の各団体による模擬店や展示会なども、校舎内など50か所以上出店され、キャンパス全体の雰囲気を盛り上げていました。

最終日には3号館下駐車場で「つるアニマルワールド」と題して出張動物園も開園され、文大生だけでなく、親子など市民の方々も楽しめるイベントとなりました。閉会式では、多くの来場者の見守るなか、夜空に華やかな花火が打ち上げられ、3日間の幕を閉じました。



模擬店も盛況



「副学長と鍋ろう」

催し物の練習や準備のため、多くの学生が連日遅くまで一生懸命作業をしていました。また、「ごみ減量計画」や「赤鉢巻部隊による飲酒見廻り」など、実行委員のみなさんの様々な取り組みにより、参加者や来場者の方々はトラブルと無縁な楽しい時間を過ごせたと思います。

このような、たくさんの「ピース」の真摯な働きにより、「第59回桂川祭」という立派な「パズル」は見事に完成したのではないのでしょうか。

文大だより

道志村で交流会が行われました

8月7日(木)に、社会学科 環境・コミュニティ創造専攻の1年生が、本学の前田 昭彦先生、道志村地域おこし協力隊の方々と交流会を行いました。

交流会では、道志村で採れた新鮮な野菜・魚を使ったBBQや、川釣り体験など、道志村の豊富な自然を満喫できるレクリエーションが行われました。

また、会の中で行われた「自己紹介・スピーチ」の時間では、1年生達の個性が光るとともに、協力隊の大野 航輔さんがスピーチの中で話した「自分が何をして生きていきたい人間なのかを、是非考えてほしい」というメッセージをうけて、1年生が将来について真剣に考えている様子がうかがえました。

実りに溢れた交流会でした。



道志村交流会(右から二人目が大野さん)

○本学の卒業生で、現在、「道志村地域おこし協力隊」に所属している香西 恵さんが中心となり、道志村のイベントや様々な取り組みを紹介する「道志手帖」を発行しています。

香西さんは「最初は手に取って読んでもらえるか不安だったが、実際に色んな人に読んでもらえて、やりがいを感じている。この手帳を通して道志村の魅力や、自分たち協力隊の活動を多くの人に知ってもらえれば。」と力強く話してくれました。

岡崎朋美さん 本学特任教授に就任

長野オリンピックスピードスケート女子 500 m銅メダリストの岡崎朋美さんが、本学の特任教授に就任されました。

本学では、有効な学びのための柔軟な思考力、自主的に学ぼうとする姿勢、困難なことに立ち向かう積極性＝「切り拓く力」を育むため、岡崎さんのオリンピックにおけるメダルへの挑戦の軌跡のみならず、その後の怪我や手術、結婚、出産など長い選手生活における数々の岐路、困難に立ち向かった貴重な経験談などを、学生たちに直接語りかけ伝えていただこうと考えています。

実際の活動は本年度後期からで、学生のキャリア形成関係講演会の講師を担当していただくほか、2020年の東京オリンピック・パラリンピックへ向けての大学連携事業への取り組みや、富士急行株式会社との産学連携などにも携わっていただく予定です。

岡崎さんは、富士急行スケート部に所属し、1994年のリレハンメルから2010年のバンクーバーまで、5回の冬季オリンピックに連続出場されました。1998年の長野オリンピックでは、女子500mで銅メダルを獲得、日本女子短距離で初のメダリストとなり、2006年のトリノオリンピックでは日本選手団の主将を、冬季五輪の日本女子最多出場記録となった2010年のバンクーバーオリンピックでは、日本選手団の旗手を務められました。

現在は、富士急行株式会社の営業推進室次長として、オリンピック選手としての経験や知名度を生かした地域、社会に対する様々な貢献活動などを担当しています。



大谷理事長(左) 福田学長(右)と
辞令交付後の岡崎朋美特任教授

文大だより

夏季オープンキャンパス報告

7月19日（土）、今年度の夏季オープンキャンパスを開催いたしました。

天候は、朝から時折雨が降るものの、昼頃には晴れ間も覗くなど開催には大きな影響はありませんでした。

主要なイベントとしては、各学科ごとに概要を説明する学科別説明会、学科別特別講義、主に1・2年生を対象とした大学概要説明会、学生ガイドによるキャンパスツアー、学科別及び大学生活や入試制度などについての個別相談会、学食・お弁当体験などを実施しました。

本年度は、英文学科の特別講義において、Lecture（講義）、Conversation（会話）、MLL（マルチメディア・ランゲージ・ラーニング）の3つを体験してもらう新しい試みを行いました。参加者からも好評を頂き、今後もこのような学科の特色を生かした企画を行っていければと考えています。

また本部棟前広場やコミホ2Fアートシアターでは、今年も各部・サークルが日頃の練習の成果を披露して大学生活の魅力をPRし、参加者を楽しませてくれました。

参加者数は、保護者等を含めて1,638名と、昨年からはほぼ横ばいの数字となりました。



入試資料配布



キャンパスツアー



個別相談



学科説明会

参加された方からは「必要な情報を十分に手に入れることができた」、「とても雰囲気がいいと思った」、「きめ細かな体制（カウンセラー常駐、留学、奨学金制度）に大変魅力を感じた」、「学生がいきいきとしていて、とても楽しそうだった」、「授業を受けて、改めて入学したいと思った」などの感想が寄せられ、好評のうちに終了することができました。

文大だより

秋季オープンキャンパス報告

本年度で第7回目となる秋季オープンキャンパスを、10月13日（月）から24日（金）までの8日間（水・土・日曜日を除く）にわたり開催しました。

台風接近の影響により、14日（火）はやむなく中止となりましたが、後半には天候にも恵まれ、多くの高校生・保護者が本学を訪れました。

主な内容として、公開授業（90分）への参加、個別相談会、学生の案内によるキャンパスツアー、無料学食体験などを実施しました。



キャンパスツアー

参加した高校生の総数は延べ304名と、昨年（307名）に比べてほぼ横這いの数字となりました。県内は123名と昨年の119名からわずかに増加し、また、県外では静岡・長野両県からの参加者がそれぞれ33名、44名と際立って多くなっています。

恒例となったキャンパスツアーでは、本学学生がガイド役となり案内いたしました。保護者も含む参加者に対し、キャンパス内の施設などをグループで回り、丁寧に説明していました。保護者からは「学生から直接話を聞いたり質問できてよかった」、高校生から

は、「家賃・アルバイトの相場などリアルな話が聞けて面白かった」等の声がきかれ大変好評でした。

また、そのほかにも「とにかく教師になるための設備は全部整っているという印象を受けた」、「大学での勉強以外にも、地域との交流や自然とのふれあいの機会がたくさんあって、より興味を持つことができた」、「受験勉強のモチベーションアップにつながった」といった感想が多く寄せられました。アンケートでは、今回秋季オープンキャンパスに参加した生徒のうち、6割以上が本学の受験を決めたと回答しており、今回の体験は彼らの励みとなったことと思います。



個別相談会

前期修了者卒業式

9月24日（水）、本部棟3階大会議室において、平成26年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は21名の学部卒業者のうち、14名が出席しました。

当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、福田誠治学長より1人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。



前期卒業式

文大だより

現職教員教育講座

本学の夏季集中講座として「現職教員教育講座」を7月24日（木）と25日（金）の2日間にわたって開催いたしました。本講座は、山梨県教育センターとの共催で、「教職10年研修事業」も兼ねており、今回も多くの小・中学校の先生にご参加いただきました。

全体テーマとして、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探る「教師の子ども理解と学習指導」を掲げ、2日間に4つの講座を開講いたしました。

第1日目は、山崎隆夫先生から、子どもに寄り添い、支えるとはどういうことなのかを考えるとともに、その手立ての中心となるべき学習指導のあり方を実践的に検討する『子ども理解と学習指導』、田所恭介先生から、子どもの瞳が輝くような学びのつくり方を具体的な教材を通して考える『学習意欲を引き出す学びづくりー社会科教育を通してー』の2講座を行っていただきました。

第2日目は、『教科に対する研究講座』として、平野耕一先生から、「身の回りにある道具を用いて手軽にでき、生徒の興味を引くような有効な実験の方法」、また岡野恵司先生から、「身近なものを使って算数のおもしろさを伝える話題を紹介し、その中にある数学的意味を考える」を内容とした2講座を行っていただきました。



「算数を楽しむ授業を作る」

教員免許状更新講習

本学では、例年教員免許状更新講習を開催しておりますが、6年目を迎えた今回は、7月5日から27日までの土曜日又は日曜日、計6日間にわたり全12講座を開講いたしました。この間、154名の方に受講していただき、12講座における延べ受講者数は447名にのびりました。

開講した講座は以下の通りです。

- 必修領域：『教育の最新事情』田中昌弥教授、市原学准教授、大島英樹立正大学教授
- 小学校教諭向け：『数学の基礎としての算数』岡野恵司講師、『感性を働かせて描いてみよう！動いてみよう！』【図工】竹下勝雄教授、鳥原正敏教授、館山拓人特任准教授【体育】柳宏教授、麻場一徳教授、『小学校英語授業での教え方：アプローチズ、スキルズ、アクティビティーズ』ヘイミッシュ・ギリズ准教授、『「溶ける」の理解とICTの活用法』山森美穂准教授、平野耕一准教授
- 小学校・中学校教諭向け：『国語科を中心とした言語活動の充実～論理的な思考力・表現力の育成のために～』鶴田清司教授
- 中学校、高等学校教諭向け：『経済学・現代日本経済を学ぶ』村上研一中央大学准教授、『国語教材の読みと授業づくり』牛山恵教授、『Authentic Material と Trivia による英語授業の活性化』松土清特任教授
- 小学校、中学校、高等学校教諭向け：『デジタル教材の新しい世界と情報モラル教育の指導』杉本光司教授、日向良和准教授、『子どもたちの心とかかわるために』筒井潤子准教授、『学級集団育成の理論とグループアプローチ』品田笑子特任教授

文大だより

都留市立宝小学校の児童が都留文科大学を体感!!

11月6日（木）、都留市立宝小学校の6年生児童20名が都留文科大学を訪れました。

まずは、学食体験から。ちょっと迷いながら食券を購入し、カウンターにて食事を受け取りました。みんな揃って「いただきます」。さすがは育ち盛り、ボリューム満点のカツカレーをたいらげる子や、定食だけでは足りずにコロッケなどをほおぼる子も。

お昼ご飯の後は、留学生との交流です。児童たちは6班に分かれ、自分たちで考えた質問を英語で伝えようとがんばっていました。留学生もまた児童の質問に日本語で答え、楽しく異文化コミュニケーションが図られました。

留学生の次は、キャンパスを歩く大学生のお兄さん・お姉さんに質問です。自分たちで考えた質問をぶつけ、アンケート調査をしました。鹿児島出身の学生さんに、「そんなに遠くから来ている人もいるんだ」と少しびっくり。

次は2号館の教室に移って、本学特任教授の北垣憲仁先生による特別講義が行われました。ムリネモ＝ムササビ、リス、ネズミ、モグラはみんな宝小学校の周りに生息する身近な動物です。これらの動物の行動を動画で見ながら、自分の頭くらいの大きさの木の实をいくつも持ち運ぶリスの力強さや、ムササビの意外な大きさに児童たちは驚いていました。またリスの歯の骨やもぐら・ヒミズの標本に触り、その感触にも感動。北垣先生からの「人間と生き物に優劣はない。だからみんなにやさしくしようね!」というメッセージは心に残ったのでしょうか。

このあとは施設見学で大学キャンパスをぐるっと一周。附属図書館をツアーしました。移動する書棚や古い蔵書に、児童たちは目を見張っていました。附属図書館は大学生だけでなく市民の皆様に開放されているので、ぜひまたお勉強に来ていただきたいと思います。



学食体験



留学生との交流



学生にアンケート



ムササビの大きさにびっくり



図書館ツアー

文大だより

本学前学長 加藤祐三先生の秋の叙勲における 受章及び横浜文化賞受賞について

このたび、本学の前学長を務められた加藤祐三先生が、平成 26 年度秋の叙勲において、瑞宝中綬章（教育研究功労）を受章され、また横浜市の第 63 回横浜文化賞（文化・芸術部門）を受賞されました。

ここに、先生の榮譽に対してお慶びを申し上げますとともに、今後益々のご壮健とご活躍を祈念いたします。

（都留文科大学学長 福田誠治）



前学長 加藤祐三先生

都留文科大学創立60周年記念事業募金についてのお知らせ

本学は、昭和 30 年に都留市立短期大学として創立し、平成 27 年度には 60 年の記念すべき節目の年を迎えます。

この度、創立 60 周年にあたり、本学のさらなる飛躍と、新しい時代をたくましく生きる「文大生」の育成を目指して、都留文科大学創立 60 周年記念事業期成会を結成し、次のとおり、記念事業を推進することになりました。

主な事業としては、本学の更なる国際化の進展を図るため、学生と外国人留学生が共に暮らし、日常生活を通じて異文化交流を図ることによって、グローバルな人材を育成する、教育寮としての機能を有する国際交流会館（仮称）の建設などを予定しております。

つきましては、次の場所に 平成 27 年 12 月末日まで 募金箱を設置しておりますので、本学教育のさらなる発展と次代を担う後輩の育成のために、募金へのご協力をお願い申し上げます。

募金箱設置場所： 本部棟 2 階 学生担当 窓口 午前 9 時～午後 6 時まで

県民コミュニティーカレッジ講座

山梨県内の大学・短期大学と NPO 法人「大学コンソーシアム山梨」との共催事業として開講している県民コミュニティーカレッジの地域ベース講座を開講しました。

今年度は、「映画から見る韓国事情」と題して、本学国文学科准教授 加藤敦子先生が講座を担当しました。

10 月 18 日（土）と 10 月 25 日（土）に計 4 回開催され、合計 93 名が参加されました。

かつて「近くて遠い国」と言われた韓国。文化・経済の交流が盛んになり、行き来する人も増えた現在、韓国に対して親近感を抱く一方で、情報が増大したがゆえに、理解しがたいと感じる場面も多くなっているようです。

本講座では、大学教員として 7 年間韓国に暮らした経験を持つ講師が、韓国の映画作品を通して、文学、歴史、文化、生活などの実感に基づいた韓国事情について語り、参加者からは「韓国への興味も深くなりました。日韓の違いも理解出来良かったです」「韓国文化に触れる良い機会になりました」などの感想をいただきました。

10 月 18 日	第 1 回	現代韓国若者事情 ～英語は必須？ 整形美人は得？～
	第 2 回	古典が伝える伝統的価値観 ～男は出世、女は貞淑？～
10 月 25 日	第 3 回	軍事政権と民主化 ～お父さんはオロオロするばかり？～
	第 4 回	格差と断絶を越えて ～地方、高齢者、外国人の今～

編集後記

民主主義は
食卓から

坂田有紀子

先日、デンマークから5人のお客様をお迎えして学長室でお茶会が開催された。お客様は、「ロラン島のエコ・チャレンジ デンマーク発、100% 自然エネルギーの島」の著者のニールセン北村朋子さんと、デンマーク人建築家フィリップ・ラスムセン氏とご家族である。デンマークで推進されている「自然と調和した持続的な社会システム・インフラの整備」を紹介するために来日されたそうだ。

お茶会の中で印象的だったのは、「デンマークでは家族でゆっくりと夕食を食べながら、学校であったことから社会問題にいたるまで様々なことを話し合うのが日常的な風景だ」という言葉だ。デン

マークの国民は社会や政治に対する関心・意識が高く、1980年代に政府が推進しようとしていた原子力発電を、国民が反対運動をおこし方向転換させたという歴史を持つ。お茶会の席で「なぜデンマークはそれほど民主主義が発達しているのか」と参加者の一人が尋ねた際に、理由の1つとして挙げられたのが先ほどの夕食の話だった。

子どものころから、学校のこと、友人関係のこと、TVで見たニュースや番組など、ありとあらゆる日常の中の出来事について家族で話し合っていれば、社会に自然と関心を持ち、自分の意見を持つようになるのだろう。家庭は最も小さな社会の単位であり、やはりここが一番の要なのだなー、と妙に腑に落ちたのである。振り返って日本はどうだろうか。忙しくて家族でゆっくり食事をとれない家庭、子どもの話に耳を傾けない親、TVを見ながら黙々と食べる家庭、子どもだけで食べる夕食、様々な事情がそこにはあるのだろうが、許されるのであれば、やはり夕食くらいは家族でゆっくり語らいながらとりたいものだ（そのためにはワークライフバランスのより一層の推進が必要！）。たかが食事と侮る事なかれ、「民主主義は食卓から」。子どもと一緒に今日あったことを語らいながら食事をする。そんな小さな積み重ねが社会を創るのだと改めて感じたひとときだった。



ニールセン北村朋子さんの著書

生命倫理の教科書

加藤 剛・野村俊明

■ 生命倫理の教科書
—何が問題なのか—

黒崎 剛・野村俊明／編著
2014年1月
ミネルヴァ書房 2,800円＋税

◇くろさき つよし
社会学科准教授

■ 戦争はどう記憶されるのか
—日中両国の共鳴と相剋—

伊香俊哉／著
2014年2月
柏書房 3,700円＋税

◇いこう としや
比較文化学科教授



本 ぶんだい堂

■ 富士山の光と影
—傷だらけの山・富士山を、
日本人は救えるのか!?—

渡辺豊博／著
2014年5月
清流出版 1,800円＋税

◇わたなべ とよひろ
社会学科教授

■ 豊田とトヨタ
—産業グローバル化先進地域の
現在—

丹辺宣彦・岡村徹也・山口博史／編著
2014年10月
東信堂 4,600円＋税

◇やまぐち ひろし
COC 推進機構准教授

